

令和5年度 第1回 廃棄物減量推進部会会議
発言要旨

【日 時】 令和5年6月8日（木）10：00～11：58

【場 所】 西宮市役所第二庁舎6階 B601会議室

【出席者】 6名（欠席者2名）

【会議の概要】

環境局長あいさつ

委員及び事務局職員自己紹介

会議成立の確認

委員総数8名中、出席委員は現在5名で、環境計画推進パートナーシップ会議運営要領第3条第2項の規定により、本日の部会は有効に成立していることが事務局より報告された。

1. 部会長・副部会長の選出について／資料1

環境計画推進パートナーシップ会議運営要領第2条第3項及び附属機関条例第3条第3項の規定により、花田委員を部会長に、藤田委員を副部会長に選出した。

2. 令和4年度第1回廃棄物減量推進部会の発言要旨の確認／資料2

令和4年度第1回廃棄物減量推進部会における発言要旨の確認を行った。

3. 指定袋制度の導入効果について／資料3

4. 一般廃棄物処理基本計画の進捗について／資料4

①事務局より資料に基づき説明が行われた。

- ・資料3では令和4年度分はすべて実績値と説明があったが、資料4の3ページにある事業系の令和4年度分は「見込み値」と説明があった。

（委員）

→説明では「見込み値」と言ったが、資料は実績値に更新できている。

（事務局）

- ・指定袋の導入後は、全体量が減り、分別が進んだ点で、効果が大きいと言える。全国的にも導入当初は大きく効果が出るが、問題はそれをキープすることである（委員）

→西宮市では有料化ではなく指定袋を採用したが、市民の受け止め方にあまり差異はない。それは、レジ袋で捨てていたのが指定袋を買わないといけなくなったからである。全国的には有料化の事例も多くあり、どこでも導入当初は減るが、個別にデータを追っていくと、リバウンドして有料化前に戻ってしまうところもあれば、減り続け

るところもあり、実態はばらばらである。平均的には減るが、気を緩めるとリバウンドしてしまうケースが多い。東京の三多摩地域では、焼却灰は埋めるしかないので、有料化や戸別収集などいろいろなことを行って減らし続けている。減り続けたところの例を見ると、市民も入ったこの部会のような場で報告して、増えぎみになったり減り方が止まってきたように思われると、すぐに対策を打っている。日野市では、大学と連携して学生と一緒にイベントをするなど啓発に力を入れたり、戸別収集も一部導入した。戸別収集にすると、どのごみを誰が出したかが分かるので量も減る。私の個人的な感想では、担当者の熱意の差及びそれに住民や各種団体が応えられるかどうかによって決まると思う。指定袋や有料化の導入当初に減るのはショックによるものなので、そのショックが日常的にあると減り続け、手を放してしまうとリバウンドする。（委員）

→西宮市では、職員の熱意もあるし、応えようとする市民の動きもしっかりとしている。甲東エココミュニティ会議の「エコニュース」を拝見したが、情報が市民にフィードバックされている点がいいと思った。日野市は環境教育に非常に熱心であるので、西宮市と似ている。（委員）。

→コープこうべではコンポストの推進を提唱して出前講座をしているが、指定袋導入以降、申込みが非常に増えている。コンポストについては、できた堆肥をどうするかという問題があるが、持ってきてもらうところを決めて園芸ボランティアに提供するなどの仕組みをつくれば、きちんと定着する。ごみを出さないことをしっかりとライフスタイルに組み込んでいくことが必要だと思う。この指定袋導入のタイミングで市民が参画できるごみ減量の取組を施策として打っていけばより減量の動きが進むのではないかと肌で感じている。（委員）

→現在は分別も進み、排出量も減っているが、手を緩めて元に戻ってしまうのは怖いので、市と連携してこの減量が続いていくようにしなければならない。先日、すべてのごみステーションのプレートに指定袋についてのシールが貼ってあるとの指摘を市民から受けた。職員の努力もあるし、市民もごみについてよく目を配っていると感心した。（委員）

→啓発については、地域の大人に対してだけではなく、中学校にも呼びかけていきたい。今回は甲東地区を取り上げていただいたが、他の地区の「エコニュース」でもごみについて取り上げて、もっと広めることが必要だと思う。この時期を逃すと台なしになってしまう。私たちも、社協のサロンやつどい場などに出向いて、ごみのことをもっとPRしなければいけないと思っている。やはり啓発が大事なので、ごみ減量推進員とも協力して進めていきたい。（委員）

→減った事実を伝えることも大事だが、それにどういう効果があるかまでを見せることが市民に響くポイントだと思う。また、小学校ではごみ教育を行っているが、中学・高校になると手薄になるとも聞いている。こういう機会に中学生・高校生を集めてごみをどう減らすかについてのワークショップを開き、その実践と成果を共有する場を持つと意識が高まると思う。（委員）

→中学生・高校生を集めたワークショップは私たちもやりたいと思っている。美化企画課の職員も非常に熱心で、毎回の定例会に来てくれて、私たちも学ばせていただいている。みんなで応援・協力していかないと、こういう問題の解決は進まないと思っている。（委員）

→ワークショップのいいところは自分で考えることである。他の自治体で計画を改定するときに高校生の意見を聞いたが、高校生は見るレンジが長いのでいい意見が多く出た。西宮市には多くの大学があるので、そういうところにも声をかけるといいのではないか。（委員）

5. 一般廃棄物処理基本計画の一部見直しについて／資料5、5-1、5-2、5-3

①事務局より資料に基づき説明が行われた。

- ・資料5-3は現在の計画の概要版の追加版というとらえ方でいいのか。（委員）

→資料5-2は章ごとの新旧対照表であるが、資料5-3はパブリックコメント用の概要版で、見直した箇所と新しく追加した箇所を分けている。パブリックコメント時に見直し後の計画の概要版を作成するかどうかについてはこれから検討したい。（事務局）

- ・製品プラスチック一括回収については、西宮市では容リ協の入札制度を利用するのか。（委員）

→現在は、容リ協会に容器包装プラスチックと一緒に圧縮・梱包して渡す想定で動いている。（事務局）

- ・製品プラスチック一括回収はまだ実績があまりなく、実証実験を見ても課題山積である。まずは市民啓発である。容器包装プラスチックのときも結構大変だったという記憶があると思うが、それを上回る困難が恐らくある。市民にとっては、「何を入れればいいのか」が悩ましい。プラスチックはあらゆるものに使われているが、外側はプラスチックであってもその中にリチウムイオンバッテリーやスプリングが入っていたりする。自治体としては、「市民に何を入れてくださいとお願いするか」が考えどころである。それがあっても市民は相当迷うし、言われたとおりにやったつもりでもリチウムイオンバッテリーの混入量が増えて事故が起きてしまう。啓発の方向性として安全なのは、「これなら大丈夫だというものだけを入れてください」というキャン

ペーンであるが、これではあまり量が集まらない。西宮市では、「市民に対してどう説明すれば一番損害が少なく利益が大きい分別物が出てくるか」を時間をかけて検討して、啓発のキャンペーンに資源を投入して市民の理解・協力を集めて、成功事例と言われるような画期的なことをやればどうか。そのときには、現在は指定袋導入直後で市民の意識がごみに向かっているので、古紙類のことも含めて一気に資源を投入して啓発することもあり得る。（委員）

→入れてほしいものを例示することは絶対に必要である。（委員）

- ・50センチ以内という制限も悩ましい。50センチに決まったのは、大きなものを通せない破碎装置しか持っていないリサイクラーがいるからである。プラスチック廃棄物で目立ち、かつリサイクラーもハッピーになると思えるものが衣装ケースであるが、これは50センチを超えるので回収できない。こういう問題が全国で起こる。（委員）

→衣装ケースについては、運搬の問題も出てくる。（委員）

→回収方法がパッカー車なのか平ボディーのトラックなのかで大きく違ってくる。保有車両の問題とパッカー車で飛散リスクの両面から業者に意見を聞く必要がある。（委員）

- ・市では製品プラスチック一括回収をモデル地区で行っているが、まだ結果は出ていないのか。（委員）

→この6月と7月の2か月、一部地域の住民にお願いして製品プラスチック一括回収のモデル事業を実施している。先週の金曜日（6月1日）が1回目であったので、まだデータはとれていないが、想定していたものを出していただいている印象ではある。今回は環境省のルールどおり50センチ未満で区切ったが、それではあまりにも量が少ないとか、逆に大きいものが入ってきて想定以上に機械が対応しにくいなど、今回のモデル事業で実態を見極めた上で、ルールづくりや広報資料の作成などにつなげていきたい。（事務局）

→モデル地区で実際に参加された住民の意見をアンケートなどで聞き取れば、「出す人が何に迷うか」や「何が出す際のネックになっているか」が明らかになる。その上で導入時には、「市民が出しやすい、リサイクラーも処理しやすい」と全国にアピールできるルールをつくることができると思う。ただ、拡大生産者責任から考えると、製品プラスチックを回収することを製造段階から考えてほしいと思う。（委員）

- ・西宮市では事業系の古紙を受け入れていないのか。（委員）

→指定袋導入時に始めたが、これから徹底していく。（事務局）

→大阪市が平成25年から行っているので、できないことはないと思う。（委員）

①事務局より資料に基づき説明が行われた。

- ・瓶のラインは工夫されていていいと思うが、リターナブル瓶は抜くのか。（委員）

→今回の分別見直しにおいて収集形態の見直しも行っている。瓶に関しては、単独収集は継続するが、パッカー車での収集になるので、施設に入ってきたときにはリターナブル瓶はないと考えている。よって、施設での回収は考えていない。（事務局）

→リユース瓶がもう少し増えるといい。この施設で集めるのはリサイクル瓶であって、もしリユース瓶が入っていても一緒に破碎してしまうのか。（委員）

→流れてくる中で姿が残っていたとしても、それが完全なものかどうかの判断が難しいので、すべてガラスのカレットとして集めることになる。（事務局）

- ・リチウムイオンバッテリーは「その他不燃」で入ってくるが、「その他不燃」には分別に迷ったものがすべて入ってくると思う。全国でごみに混じったリチウムイオンバッテリーによる火災事故が起こっているが、この新施設であればピットの辺りで起こる可能性がある。研究して何か改善されたところがあれば教えてほしい。（委員）

→西宮市では破碎した後にコンベヤーで流れているときに発火した事例があるので、新施設では、「その他不燃」は一度ピットに落とし、そこから手選別ラインに載せて手選別でできるだけ取っていくことを考えている。その後、低速破碎機でゆっくりと潰してコンベヤーで運んでいくが、コンベヤーで発火した場合は、消火設備等を使ってすぐに消火に当たる計画を立てている。（事務局）

- ・「その他不燃」というネーミングが事の本質を表していると思う。市民からすれば、これはここ、これはここと決まっていて、ある程度便利な回収の仕組みがあれば、それなりに行う。リターナブル瓶とリチウムイオンバッテリーはある視点から見ると同じで、両方ともそういう回収の仕組みがない。

リターナブル瓶は、かつては御用聞きビジネスモデルの酒屋が回収を行っていたが、ほとんどコンビニになったために回収できなくなり、結局ガラス瓶として一緒に回収されることになった。それによって、市民としてはリターナブル瓶とカレットリサイクル瓶を意識することがなくなった。ただ、環境やリサイクルの観点からすると、せっかくリユースできるものであればリユースしたい。そうなると、酒を造ったり売ったりしているところか行政が何とかする話になるが、専用のケースに入れて平ボディのトラックで集めるから成立するものであって、それ以外の収集方法はもともとできない。行政がやる以上、現状のようにガラス瓶として一緒に集めるしかないと思う。あとは、熱心に回収に取り組んでいる酒屋を支援することが考えられる。

リチウムイオンバッテリーに関しては、もともとリサイクルやリユースは全く考えられておらず、火災などの事故が全国的に知られるようになる前にいろいろなものに使われるようになってしまったので、そもそもシステムが全くない。リチウムイオンバッテリーには非常に小さいものもあるし、電気を使っているからといってボタン電池もあるので、どれに入っているか市民は分からない。その中でも電子たばこには確実に入っているし、誰もが電子たばこだと判断でき、しかも使い捨てに近い使われ方をするので、メーカーのほうで「ここに捨ててください」とするべきだと思う。事業者に働きかけて個別回収させて、行政としてはそれをできる限り支援して何とかするしかない。そういうことをすると、部分的には改善すると思う。（委員）

- ・ソーラーパネル以外にも再生可能エネルギーを使えそうな気がするので、何とか検討してほしい。（委員）
- ・新施設の名称について市民から募る時間はないのか（委員）
→公募するのは難しい。（事務局）
→西宮の施設だと分かるような名前がいいと思う。（委員）

②名称について部会で決定することに決定した。

7. 今後のスケジュールについて／資料7

①事務局から資料に基づき説明が行われた。

- ・青い字が見にくいので、できれば白抜きにしてほしい。（委員）

8. その他

①事務局より次回以降の日程など連絡事項が伝えられた。

- ・本日は2名欠席なので、できるだけ多くの方が出席いただけるよう日程を調整してほしい。（委員）